



Reshaping Work

AIで拓く、新しい世界への挑戦

— 人とAIの共創 × 価値創出 —

Presented by 業務をリデザイン(B)分科会

業務をリデザイン(B)分科会



LEADER



堀池 真理奈

スター精密株式会社

SUB
LEADER



山本 翔大

日東工業株式会社



大野 哲史

株式会社JR西日本
ITソリューションズ



野波 星花

株式会社トーカン



木村 俊介

株式会社スターシステム



伊藤 聡志

愛三工業株式会社



西川 貴庸

株式会社アシスト

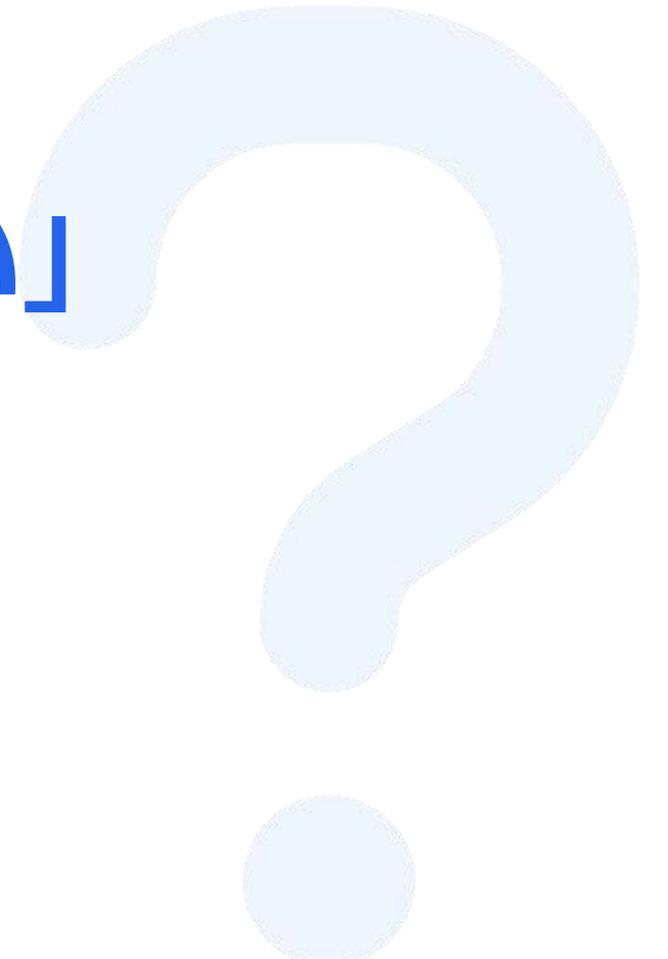


熊谷 健司

株式会社アシスト

**「AIで拓く」とは——
AIを使いこなすことではない。
AIとともに働き、切り拓くこと。**

AIは使われているのに、
なぜ「AI活用は進んでいない」
と言われるのか？





AIツールの導入やAIの利用は進んでいる



それでも、「AI活用は進んでいない」と言われる



AI活用における理想の姿と現実の活用状況の間に、
評価を中心とした認識のずれがあるのではないか





「AI活用が進んでいる状態」（理想の状態）
の捉え方にずれが生じている可能性がある。



AIそのものではなく、
AI活用によって業務がどう変わったかを見る。



AI活用を「業務の変化」という視点で捉え直す。





AIは導入・活用されている。
しかし、今のAI活用は業務の変化は見えづらい。



では、どう見れば
具体的な業務の変化をとらえられるのか？



業務が変わるためには、
AI活用を前提に業務のやり方の見直しが必要。

業務の変化の度合いは、

「AI活用を前提に、どれだけ

業務の在り方が再設計されたか」

という観点で、段階的に評価できる。

Point

この観点から捉えた業務のあり方を「**業務リデザイン**」と呼ぶ。

リデザインレベルの定義



| | | | |
|------|-----------|-----------|------------------|
| Lv.4 | 組織運営リデザイン | 会社全体 | 意思決定や組織運営の前提が変わる |
| Lv.3 | 業務構造リデザイン | 業務プロセス全体 | 業務の進め方そのものが変わる |
| Lv.2 | 業務単位の効率化 | 業務プロセスの一部 | 業務の一部を任せられる |
| Lv.1 | 補助的活用 | 個人タスク | 作業の一部が楽になる |
| Lv.0 | 未活用 | — | 何も変わらない |



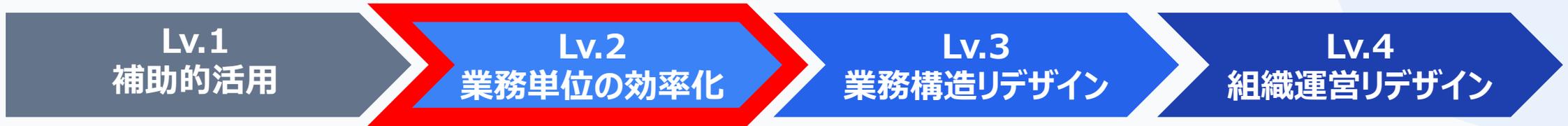
Lv.1

部分的活用 (スポット利用)

対象範囲 : 個人タスク (単発工程)

変化の内容 : 作業スピード・アウトプットの質向上

人の役割 : 内容確認・手直し



Lv.2

業務単位の効率化（部分的リデザイン）

対象範囲 : 既存業務プロセスの一部区間

変化の内容 : 業務の効率化・品質の均一化

人の役割 : 全体の流れ管理・例外対応

Lv.1
補助的活用

Lv.2
業務単位の効率化

Lv.3
業務構造リデザイン

Lv.4
組織運営リデザイン

Lv.3

人とAIが協働する業務プロセスへの転換 (業務構造リデザイン)

対象範囲 : 業務プロセス全体 (部門または顧客接点単位)

変化の内容 : 業務の進め方そのものが変わる

人の役割 : 判断・改善・顧客対応に集中

Lv.1
補助的活用

Lv.2
業務単位の効率化

Lv.3
業務構造リデザイン

Lv.4
組織運営リデザイン

Lv.4

人とAIが協働する組織への転換 (組織運営リデザイン)

- 対象範囲** : 組織運営全体 (戦略・業務・意思決定などの仕組み)
- 変化の内容** : 組織の動かし方そのものが変わり、
AIの提案を前提とした運営が回る
- 人の役割** : 方針決め・新しい挑戦に注力する



アニメーションで学ぼう！

業務リデザインの視点で見る
「AI活用」



Lv.1
補助的活用

Lv.2
業務単位の効率化

Lv.3
業務構造リデザイン

Lv.4
組織運営リデザイン

究極の謝罪プロンプト

VS

業務リデザイン



本動画の音声は、無料AI音声合成ソフト「VOICEVOX」を使用しています。

【映像から学ぶ】 重要なポイント

現在地

Lv.2 業務効率化

| | |
|-----------|------------|
| 🎯 目的 | 効率化・負荷軽減 |
| ⚙️ 業務プロセス | 既存業務にAIを追加 |
| 📏 活用範囲 | 部分的・スポット |
| 📈 成果の性質 | 限定的な改善 |

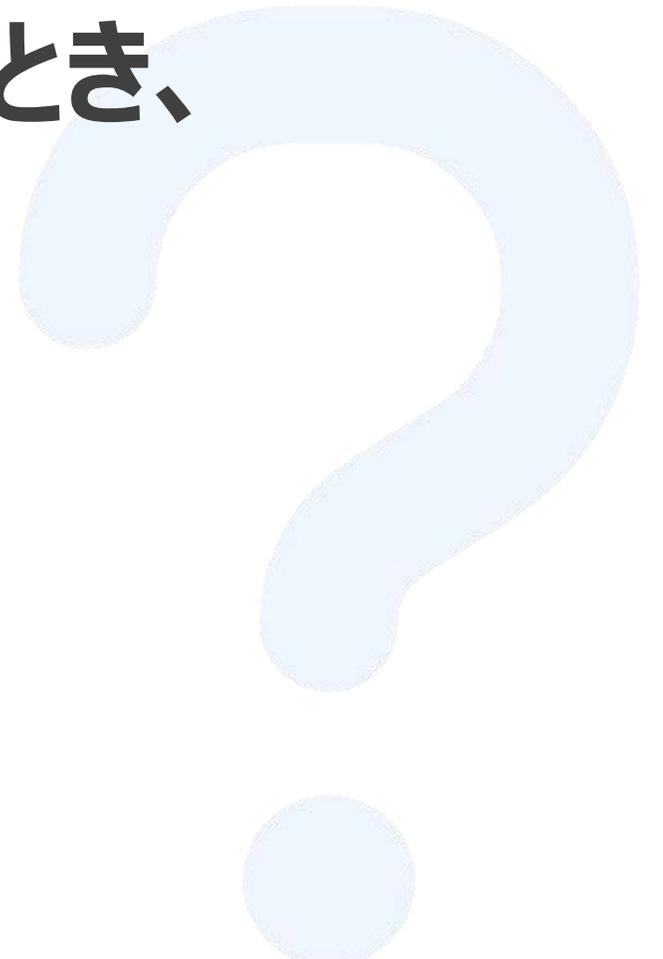
理想の状態

Lv.3 業務構造リデザイン

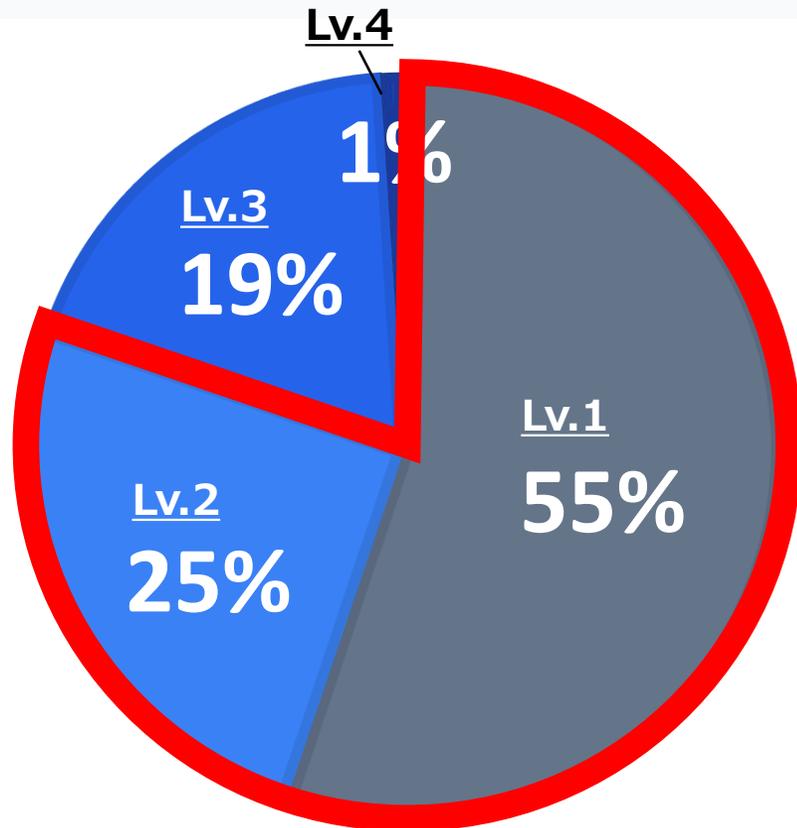
| | |
|-----------|--------------------------|
| 🎯 目的 | 業務の質・成果の向上 |
| ⚙️ 業務プロセス | AIとの協働を前提に 業務プロセスを再設計 |
| 📏 活用範囲 | プロセス全体 |
| 📈 成果の性質 | 業務の質・成果水準が 継続的に向上 |

Lv.3は、AIを「使う」段階ではなく、
AIと「一緒に仕事をする」ことを前提に業務が設計されている状態

業務リデザインの観点で見たとき、
私たちのAI活用は、
どこまで進んでいるのか？



リデザインレベル別の事例分布で「現在地」を確認



調査概要

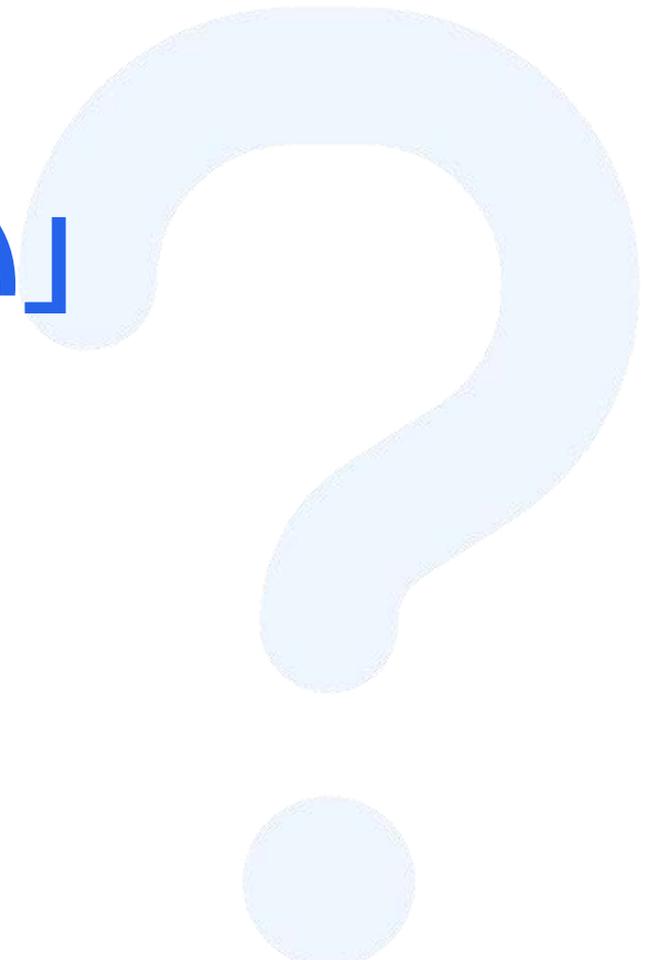
| | |
|-------|------|
| 公開情報 | 190件 |
| アンケート | 50件 |
| 計 | 240件 |

結論

業務リデザインの観点で見ると、
AI活用の現在地（到達点）は

Lv.2 業務単位の効率化
(部分的リデザイン)

AIは使われているのに、
なぜ「AI活用は進んでいない」
と言われるのか？



Lv.2のAI活用は何が足りないのか？

AIは“道具”



個々の作業を効率化する存在

AIは“仕事の相棒”



業務プロセスの中で役割を持つ存在

Lv.2では、AI活用による業務の変化が見えにくい



✓ 多くの企業でAIは利用されている



! しかし、業務の構造には大きな変化が見られない



💡 そのため、
現状では「AI活用は進んでいない」と評価されてしまう

現状を踏まえ、これから目指すべきはどこか。

AIを使っているだけでは、業務は変わらない。

私たちが目指したいのは、

AIを使っている状態ではなく、

「業務が変わった」と言える状態。

“AIで業務をリデザインする”ことの本質とは：

人とAIの協働を前提に、業務や組織が成立していること

(Lv.3 業務構造リデザイン / Lv.4 組織運営リデザイン)

その結果：

新たな価値・より大きな価値が生まれる

**AIと協働し、共創する世界
それが、私たちが描く「新しい世界」**

「新しい世界」を目指す——

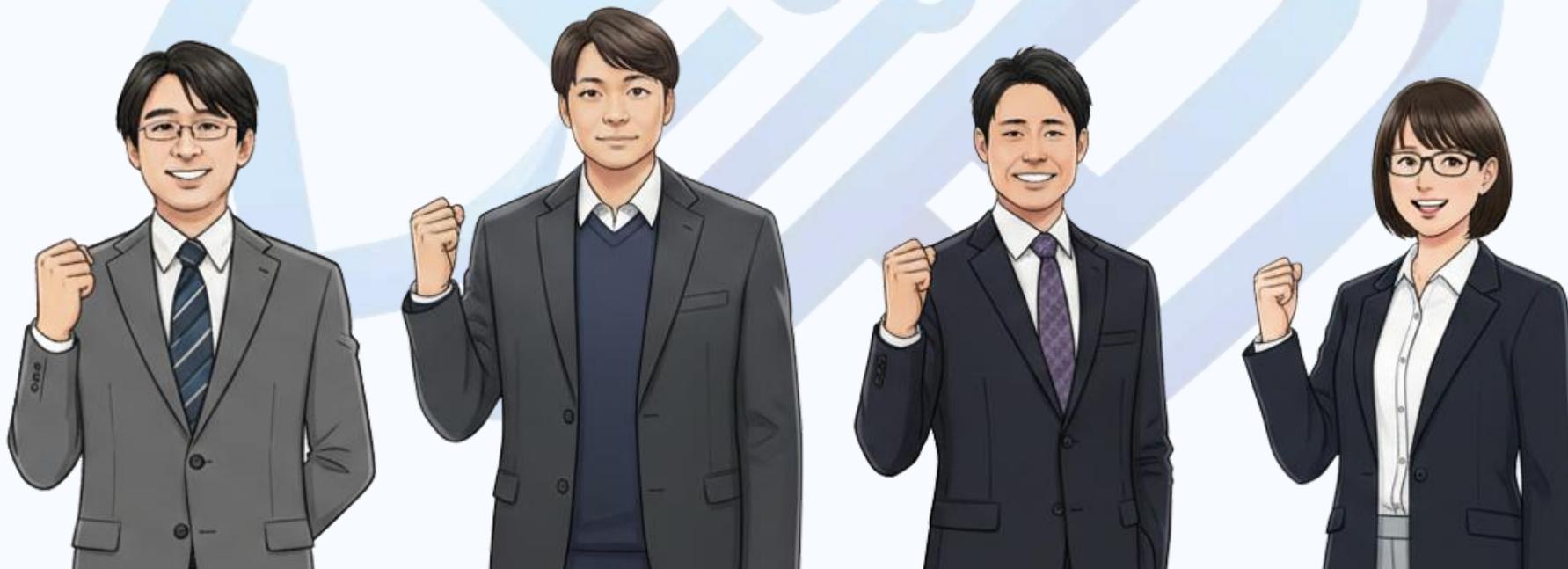
しかし、自分の現場でやろうとした瞬間、
さまざまな課題に直面する。

ここからは、

“Lv.3への移行を進める人”の目線で考える。

これから自社で新しい世界へ挑戦するあなたへ

— 実際に Lv.3 への移行を進める立場で考える “実践の視点” —

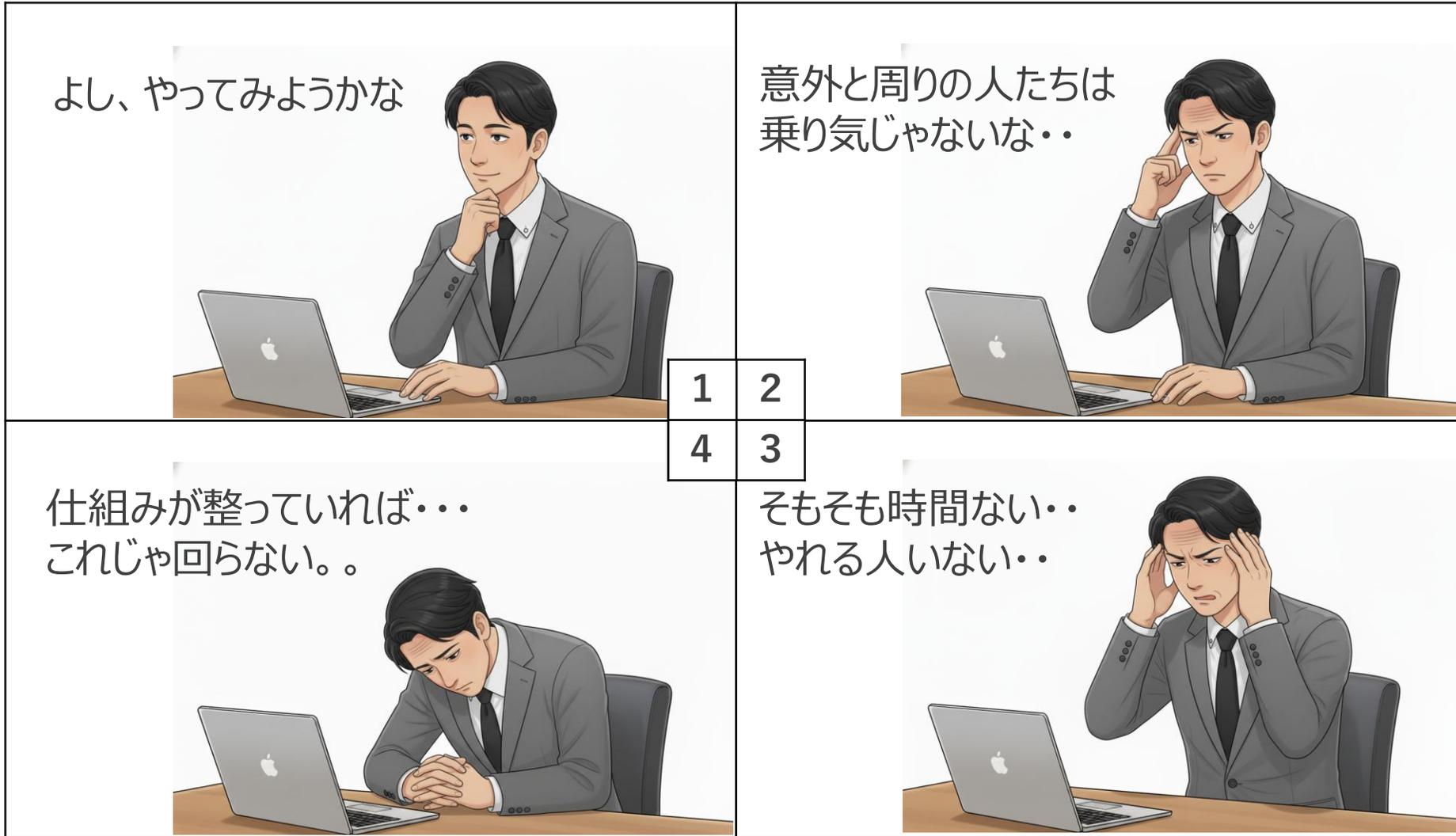


どうすれば

新しい世界に到達できるのか



Lv.3を目指そうと試みてみた——



課題が次々に現れる

変革成立の視点で課題を捉える

Lv.2 改善 – 既存業務の延長線上

- 目的 : 効率化、省力化、コスト削減
- アプローチ : 今のやり方を速く・楽にする
- 対象 : 個別のタスクやプロセス
- リスク : 低い（失敗しても現状維持）



Lv.3 変革 – 業務のあり方そのものを変える

- 目的 : 価値創出、競争力強化
- アプローチ : 新しいやり方で成果を出す
- 対象 : 業務プロセス全体、組織構造
- リスク : 高い（構造変化を伴う）

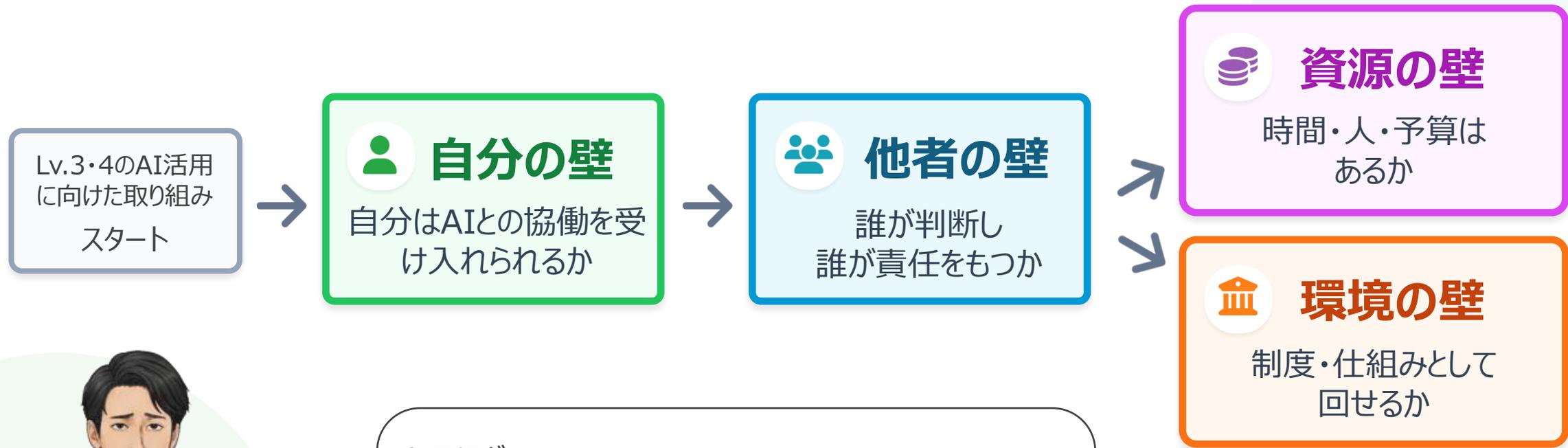


Point

Lv.2の延長で課題を捉える限り、見えてくるのは「改善すべき点」だけ。

Lv.3以降を目指すには、「変革が成立するかどうか」という視点で課題を捉え直すことが必要。

変革成立の前提条件として整理した「4つの壁」



なるほど～・・・

やみくもに課題への解決策を考えていたけど、

変革の視点で課題を整理する必要があった。

それが、**変革に必要な「前提条件」**だったんだ。



自分の壁

AIとの協働を前提に業務を考え、 まず自分がやってみようと思えるか



AIの得意・不得意が整理できていない

AIができること・できないことへの理解不足や、過度な期待・過小評価が、適切な活用の妨げになる。



AIを業務判断に組み込むことに、踏み切れない

「仕事を奪われるのではないか」という漠然とした不安や、新しいやり方への心理的な抵抗感がブレーキとなる。



AIと人の役割を前提に、業務を再設計できていない

AIツールを使いこなすためのリテラシーや、データを読み解くスキルの不足が、実践への高いハードルとなる。



他者の壁

関係者と役割をすり合わせ、 変革の進め方を合意できているか



関係者が増え、変革に関する判断が進めにくくなる

関係者が増え、意見集約が困難になり意思決定が停滞する。



AI活用を前提とした役割分担を、関係者間で共有できていない

部門間の対立や連携不足により、データ共有やプロセス統合が進まない。



業務や役割が変わることへの懸念があり、判断を先送りしてしまう

変革に伴う利害関係や役割分担の変化への抵抗により、合意形成や意思決定が停滞する。



資源の壁

変革を継続・拡大するための 時間・人・データが確保できているか



日常業務の中で、変革に取り組む余力を確保できない

日々の業務に追われ変革に取り組む時間が確保できず、AIプロジェクトを推進できるスキルを持った人材も不足している。



本格的な展開に向けた投資判断ができない

成果が見えにくい初期段階において、本格的な導入・開発にかかる予算の承認が得られず、PoC（概念実証）止まりになる。



AI活用を前提としたデータが、業務で使える形になっていない

AIに学習・参照させるためのデータが散在していたり、紙媒体のままだったり、活用可能な状態に整備されていない。



環境の壁

制度や仕組みが、 変革の進め方に追いついているか



AIを活用した新しい取り組みが、正しく評価されにくい

既存のKPIや人事評価制度が、AI活用による「質の向上」や「新しい役割」を正當に評価できず、挑戦する動機を削いでしまう。



どこまで任せてよいかの判断基準がなく、現場が動きづらい

ガイドラインや責任分界点が不明確なため、現場がリスクを恐れて活用を躊躇したり、禁止事項ばかりが先行して身動きが取れない。



部門をまたいだ業務やデータ活用を、前提とした進め方ができていない

縦割り組織の弊害や部門間の壁により、横断的なデータ活用や柔軟なプロセス変革が進まず、部分最適に留まってしまふ。

変革成立の前提条件として整理した「4つの壁」

自分の壁

個人の理解・心理・スキルに起因する制約が、変革の「起点」を弱める壁

他者の壁

関係性・合意形成・利害調整に起因する制約が、変革の「前進」を止める壁

資源の壁

時間・人員・予算・データといった制約が、変革の「実行」を難しくする壁

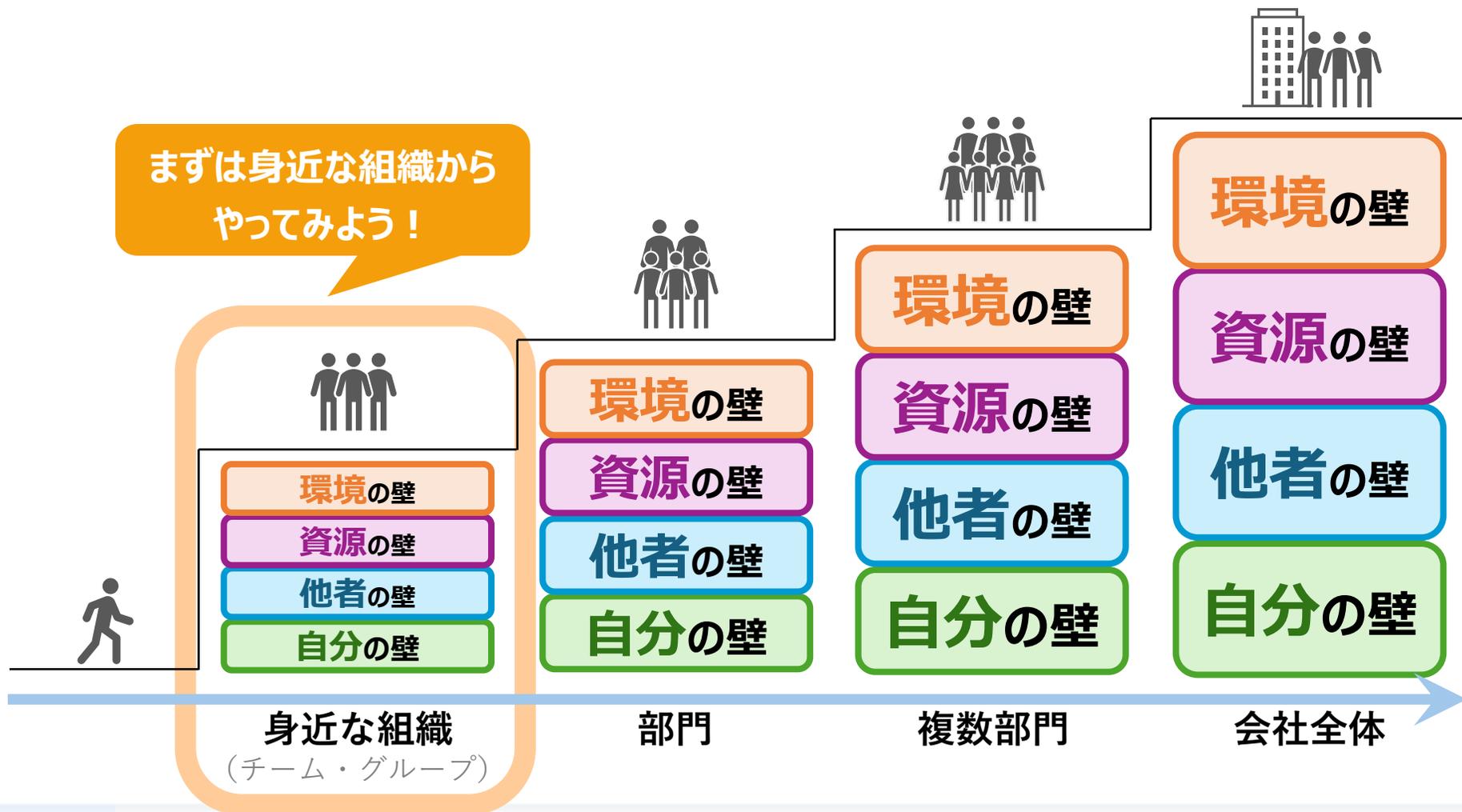
環境の壁

制度・ルール・組織構造などの仕組みに起因する制約が、変革の「定着」を阻む壁

階層組織では、変革は段階的に進める



まずは身近な組織から
やってみよう！



STEP 1: 最初のアプローチ

変革を現実的に前へ進めるために

自分の壁

試してみる

自分の業務を題材にAIを前提としたやり方を試す

Point

試行により、AIと協働することの価値・魅力を実感できる

他者の壁

共有して慣れる

AI活用を個人の試行に閉じず、
未熟さや失敗を含めて他者に共有する

Point

試行や失敗が共有されたとき、組織の受け止め方がどう変わるかが分かる

資源の壁

足りないことに気づく

実際にAIと協働前提の業務プロセスを試行し、
実行段階で生じる無理や不足を可視化する

Point

次に整えるべき制度・役割・支援が何かを特定できる

環境の壁

回る形を試す

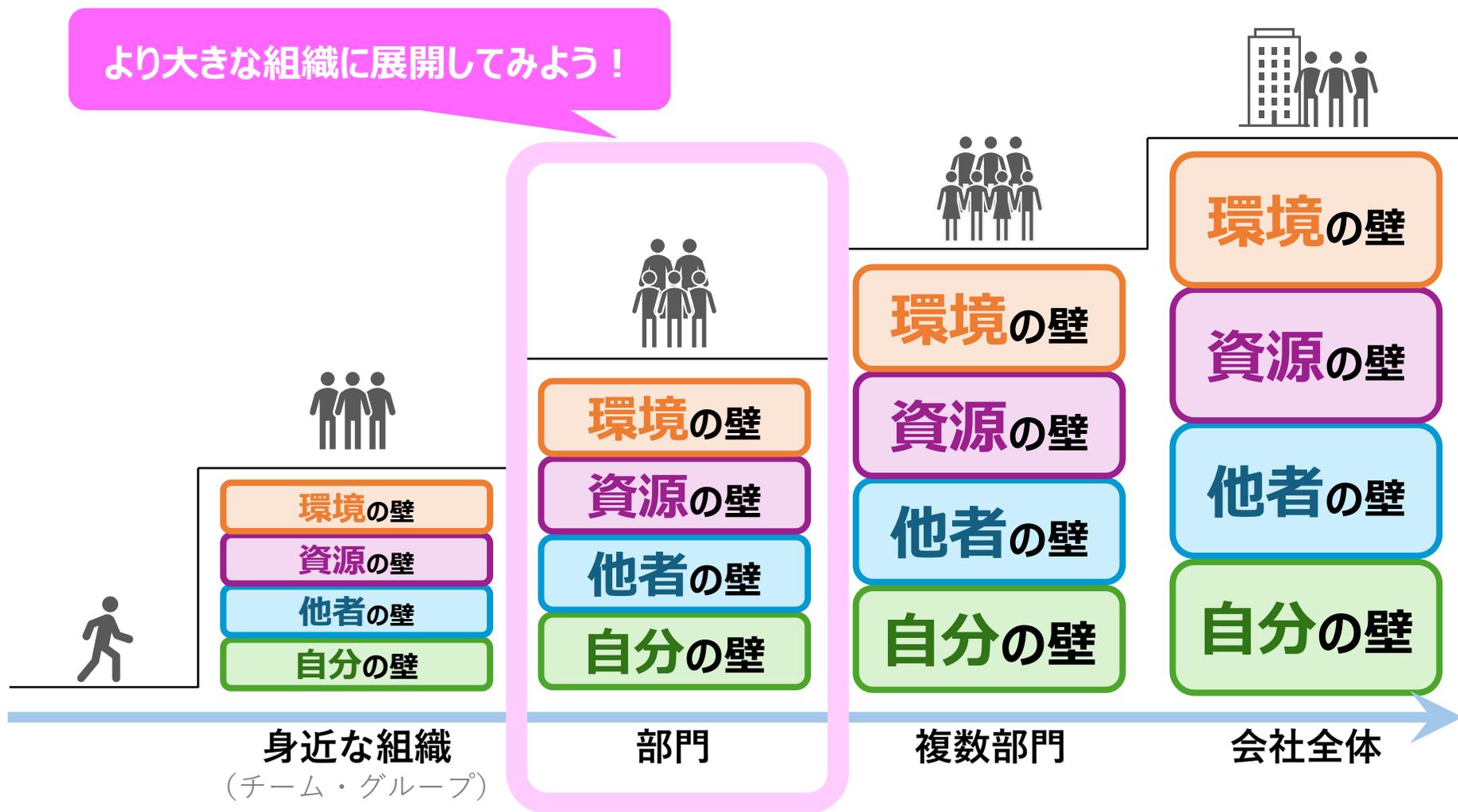
小さな業務を題材に、
AIと共に働くための業務の扱い方を整理し、
実際に人とAIが協働する業務の形を試してみる

Point

AIとの協働を前提とするために何を整える必要があるのかが明確になる

組織が大きくなると、壁の“影響範囲”と“難易度”が変わる

より大きな組織に展開してみよう！



STEP 2: 展開のためのアプローチ

変革をさらに大きな組織へ展開するために

自分の壁

説明できる形にする

個人の試行で得た価値や不安を整理し、
組織として判断・検討できる材料に変換する

Point

広げる価値とリスクを整理し、「個人の感覚」ではなく「組織の判断」として扱えるようになる

他者の壁

共通理解として広げる

個人の試行錯誤を整理・共有し、
AIとの協働を組織の共通理解として広げる

Point

人に依存しない形で知見が蓄積され、部門や担当が変わっても取り組みが引き継がれていく（おすすめ施策：コミュニティサイト）

資源の壁

配分を決める

見えてきた制約をもとに優先順位を整理し、
AI活用を継続可能な取り組みとして位置づける

Point

時間・人・予算・データの使いどころが明確になり、「頑張り続けないと回らない状態」から脱却できる

環境の壁

仕組みにする

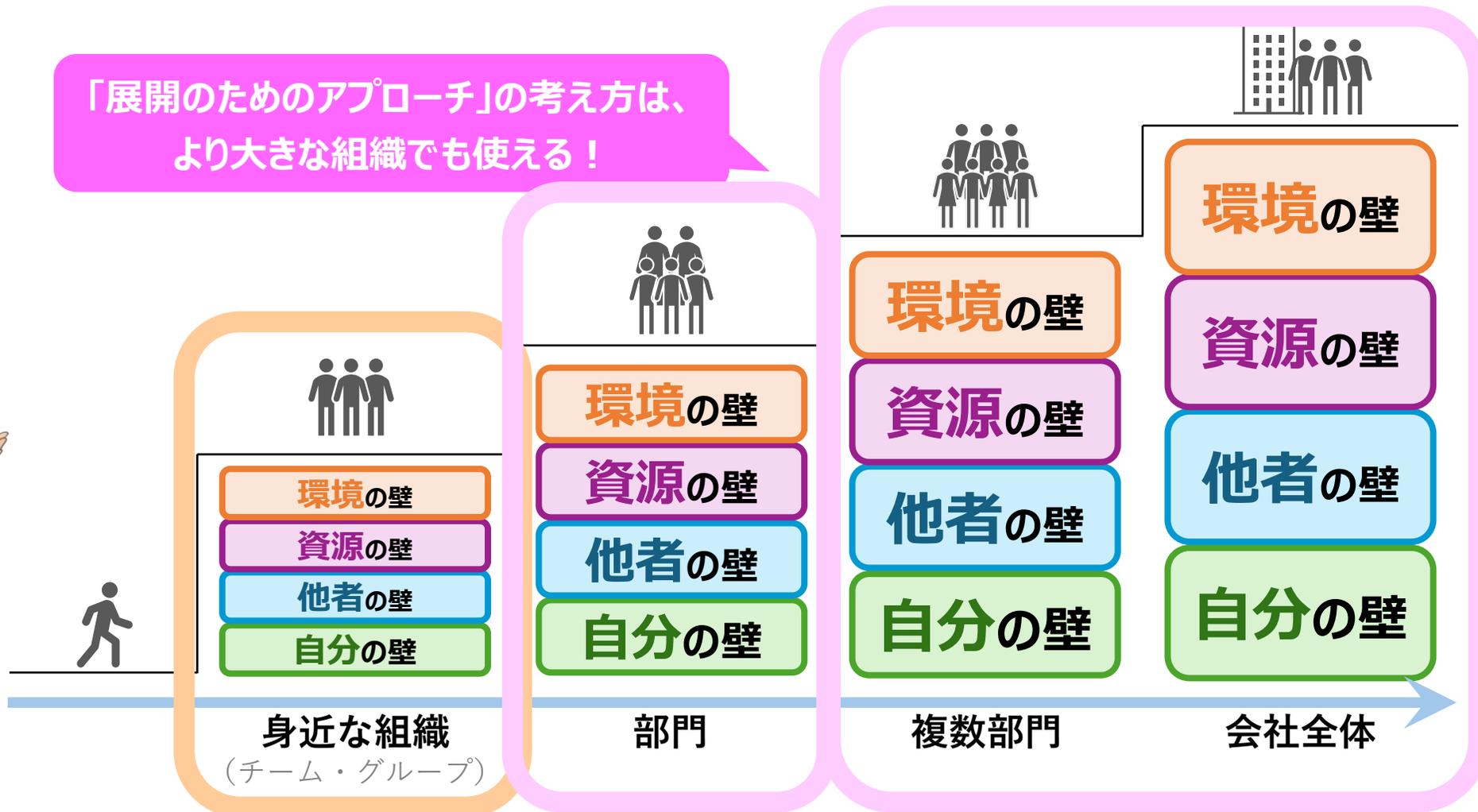
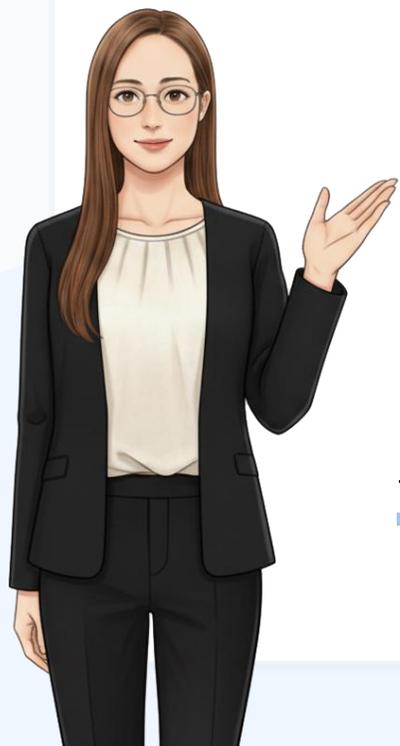
小規模で成立したやり方を整理し、
誰がやっても回る“組織の仕事”として定着させる

Point

判断や運用が属人化せず、組織が大きくなっても同じ前提で運用できる

会社全体へ変革を広げていく

「展開のためのアプローチ」の考え方は、
より大きな組織でも使える！



各アプローチの役割

— 各壁に対する、段階的な役割の変化 —

自分の壁

最初 試してみる

展開 説明できる形にする

他者の壁

最初 共有して慣れる

展開 共通理解として広げる

資源の壁

最初 足りないことに気づく

展開 配分を決める

環境の壁

最初 回る形を試す

展開 仕組みにする



アニメーションで学ぼう！

AIと共に歩む 業務リデザインの記録



Lv.1
補助的活用

Lv.2
業務単位の効率化

Lv.3
業務構造リデザイン

Lv.4
組織運営リデザイン



ひろし覚醒！ AIと共に歩む 業務リデザインの記録



本動画の音声は、無料AI音声合成ソフト「VOICEVOX」を使用しています。

【映像から学ぶ】 AIと共に歩む業務リデザインのポイント

- ✓ **現場と人から始める** — 技術より、業務と人を見る
- ✓ **共感と対話で広げる** — 説得ではなく、理解をつくる
- ✓ **小さく試して積み上げる** — 一気に変えない
- ✓ **前例は自分たちでつくる** — やって見た人が次を開く



壁の性質を見極めながら、
「小さく成立させ、段階的に広げていく」戦略が有効

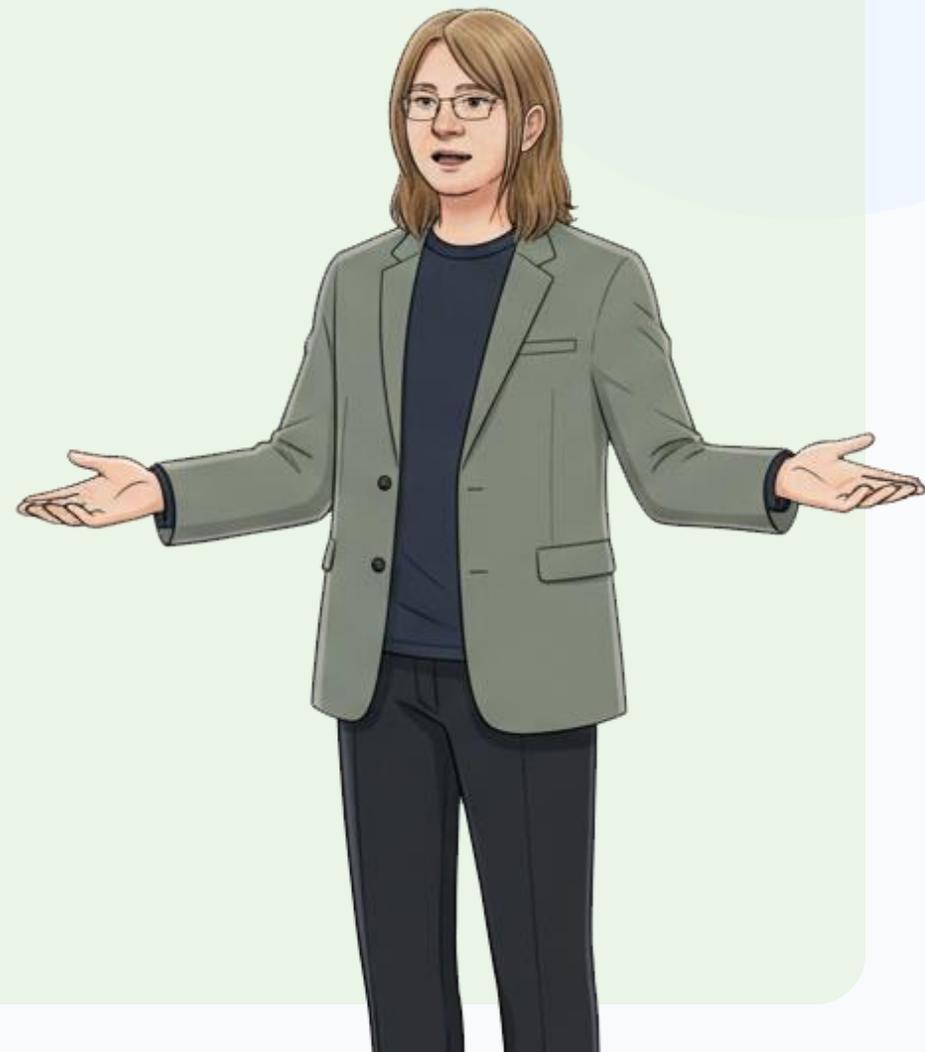
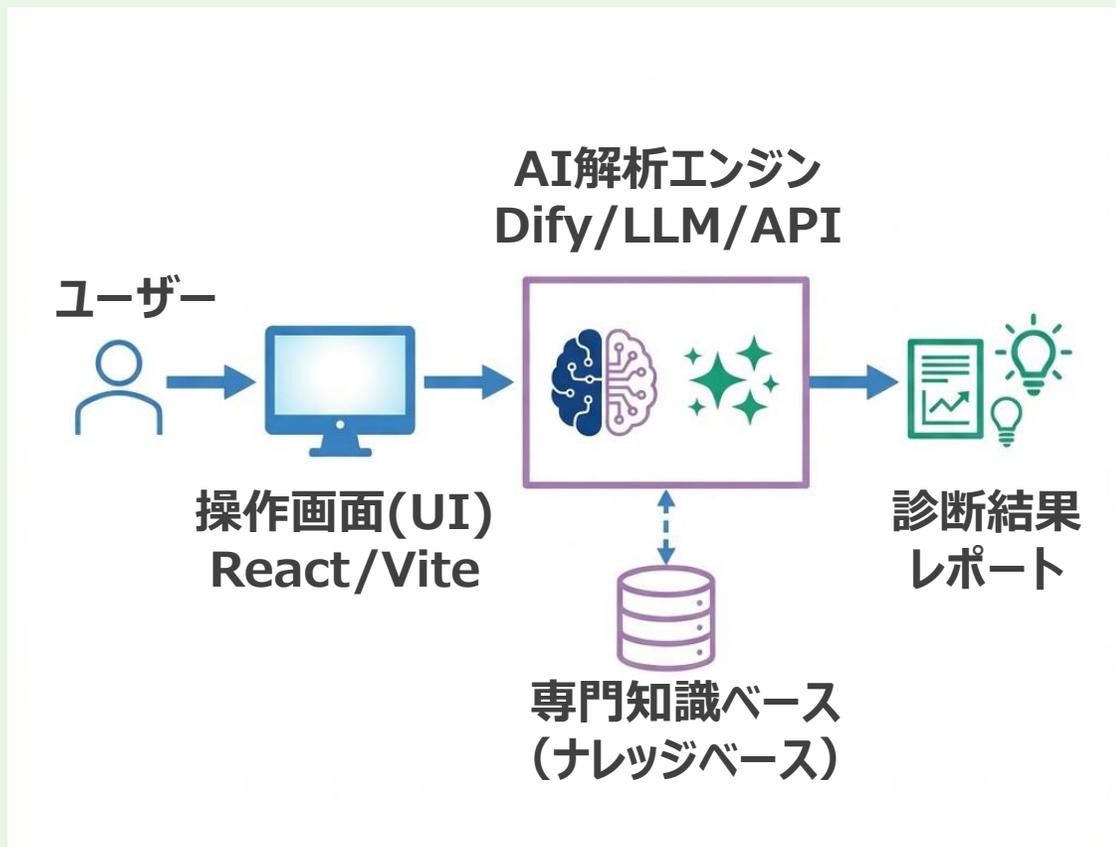


AIを活用し、変革支援ツールを作ってみた！

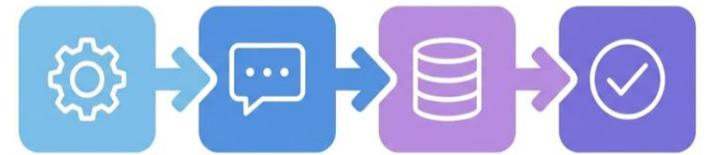
デモでお見せします！



我々が構築した変革支援ツールは、こんな構造です。



どんなふうに使われているか



こちらでもデモでお見せします！



【サンプル提供】変革支援ツール



我々が作成した
「変革支援ツール」
使えます！



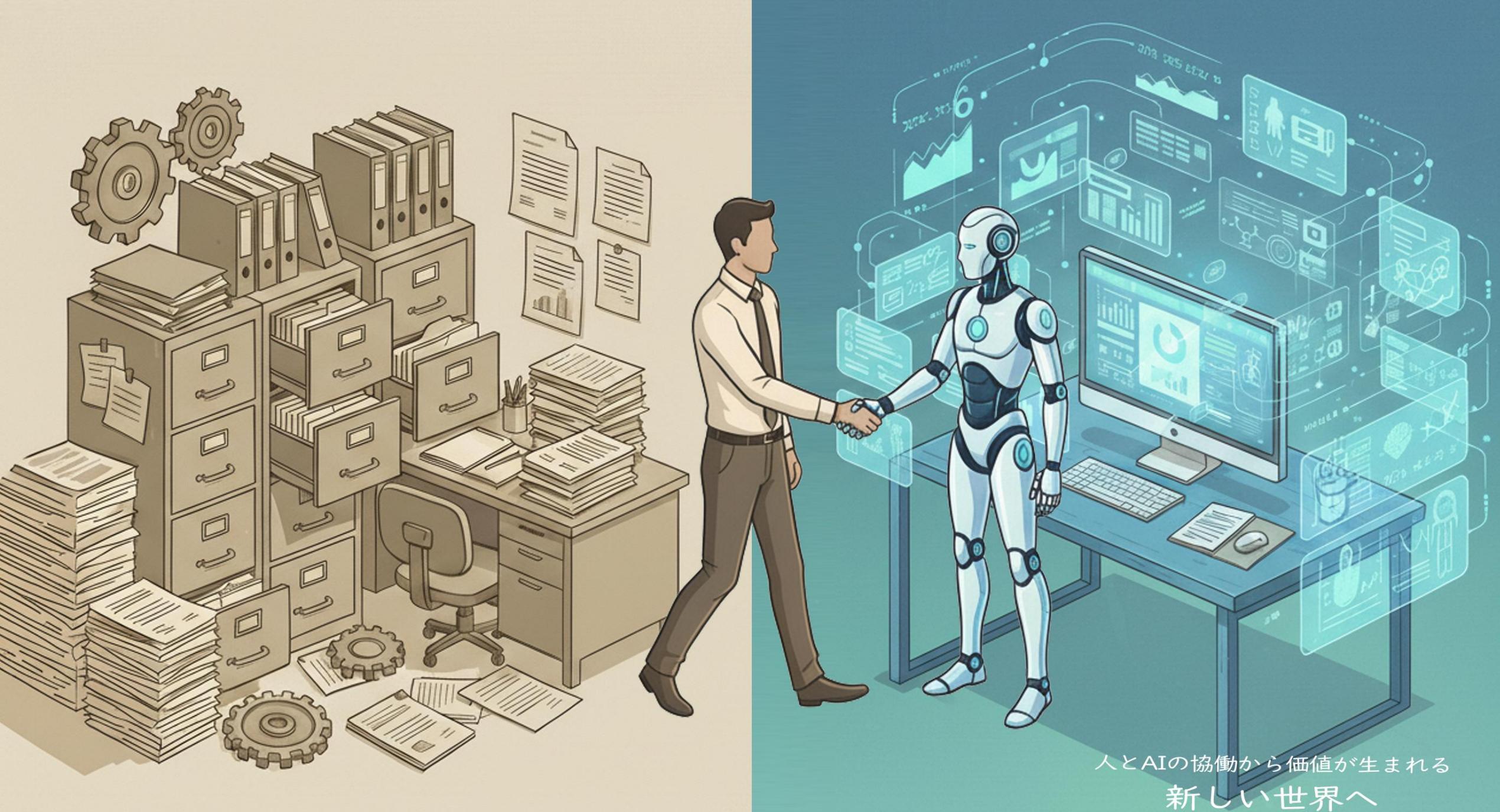
Redesigning Work

見事覚醒を果たしたひろし登場！

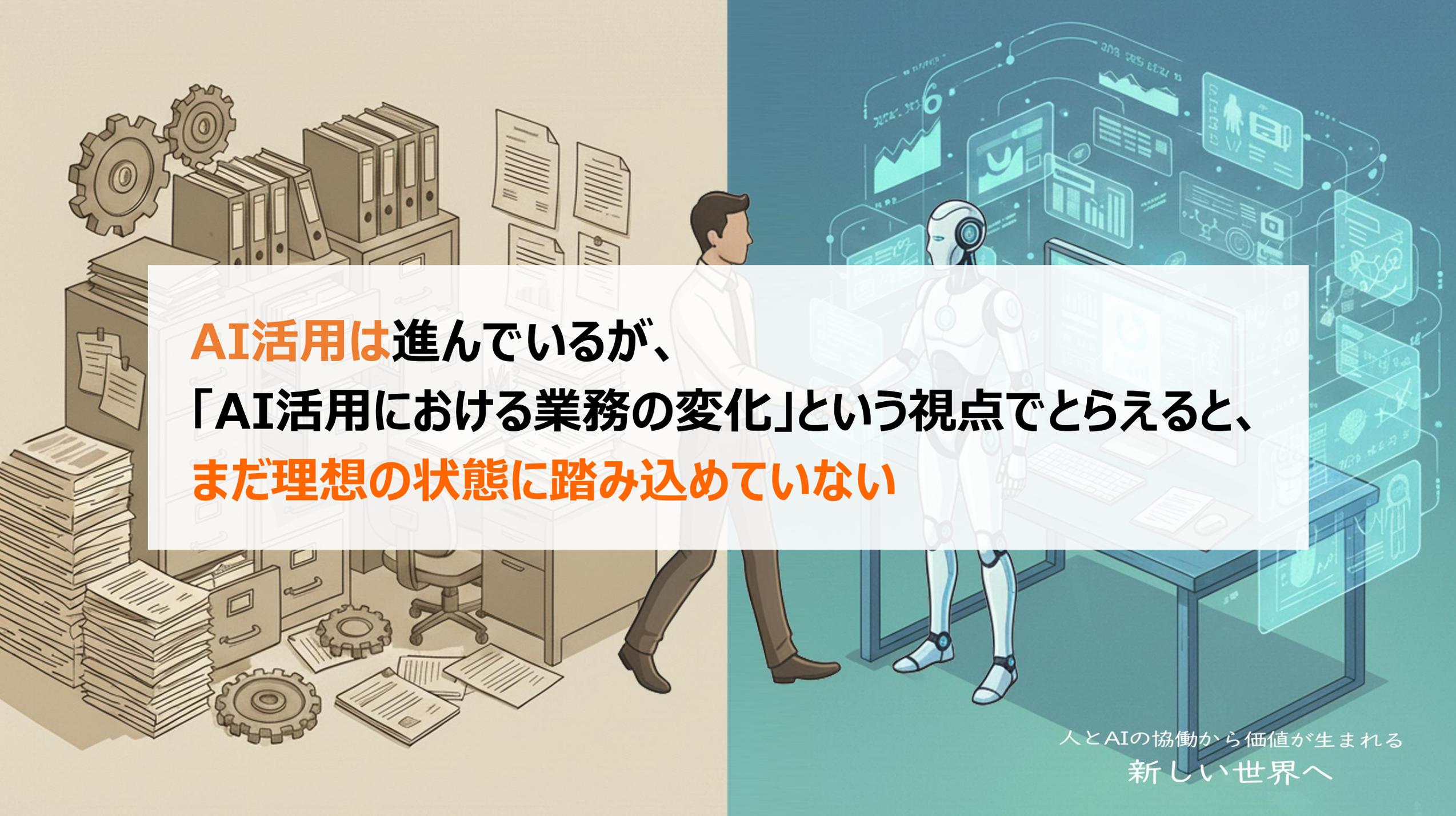


**人とAIの協働から価値が生まれる
新しい世界への挑戦**

人とAIの協働から価値が生まれる
新しい世界へ

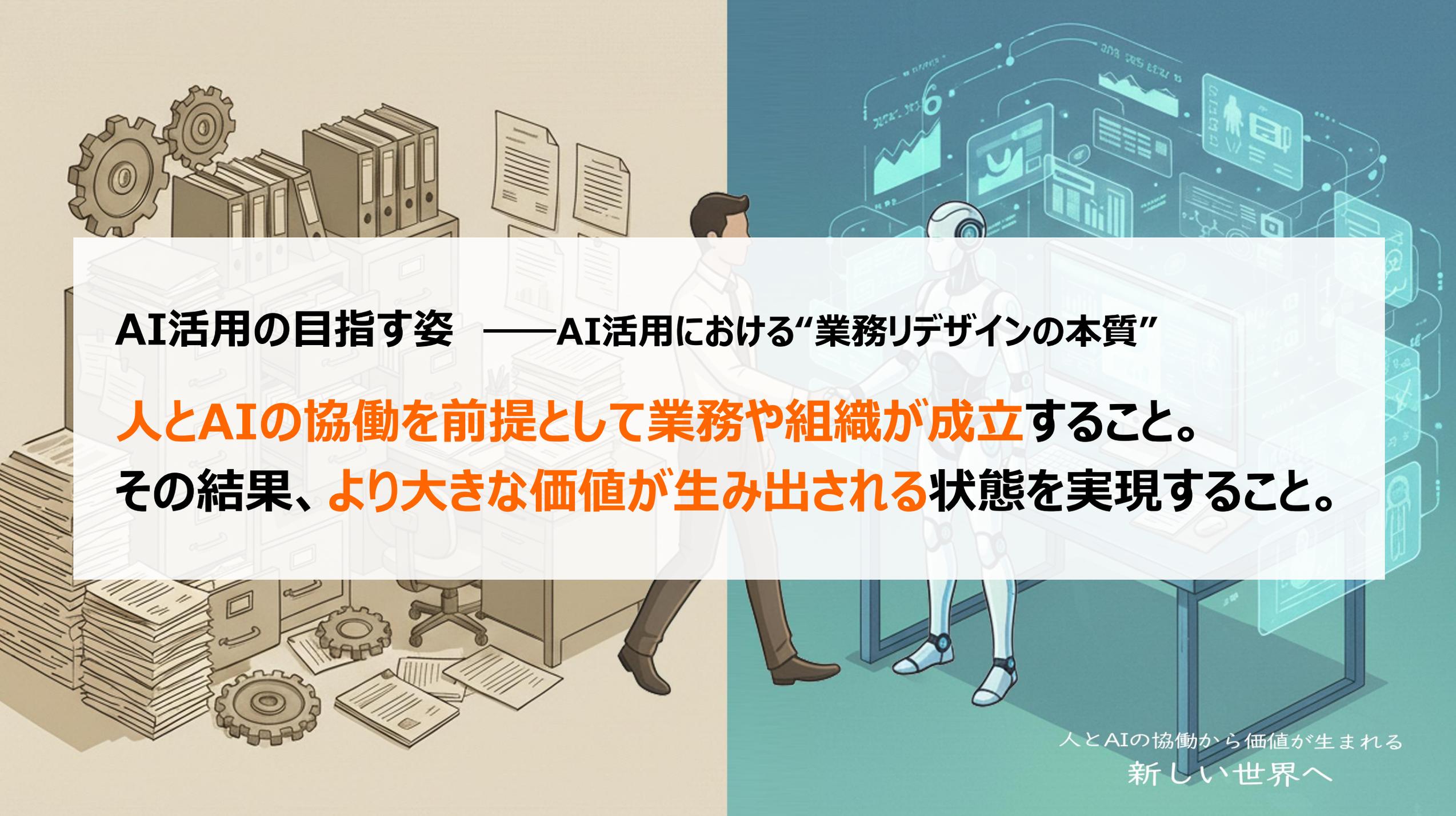


人とAIの協働から価値が生まれる
新しい世界へ



**AI活用は進んでいるが、
「AI活用における業務の変化」という視点でとらえると、
まだ理想の状態に踏み込めていない**

人とAIの協働から価値が生まれる
新しい世界へ

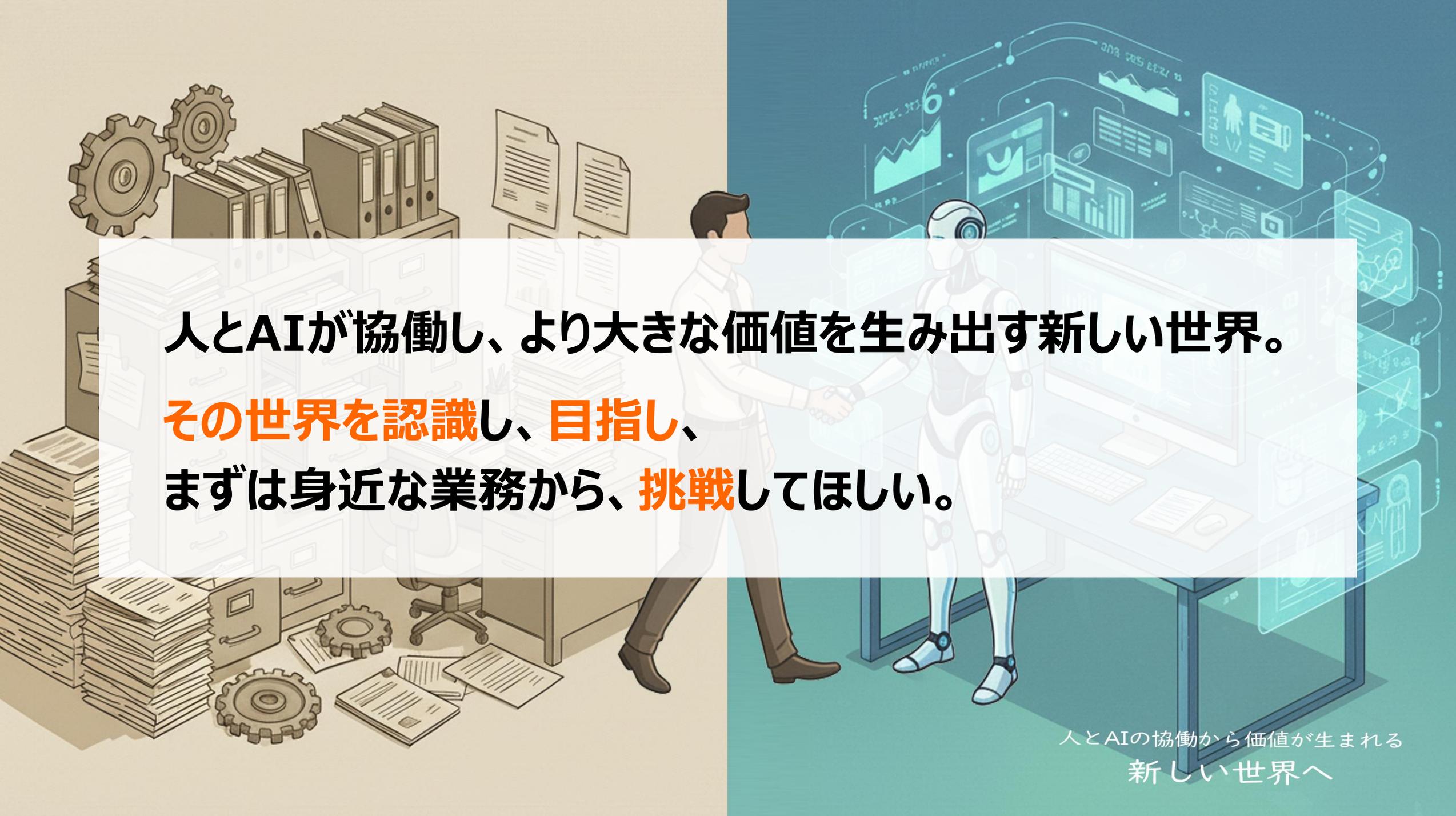


AI活用の目指す姿 ——AI活用における“業務リデザインの本質”

人とAIの協働を前提として業務や組織が成立すること。

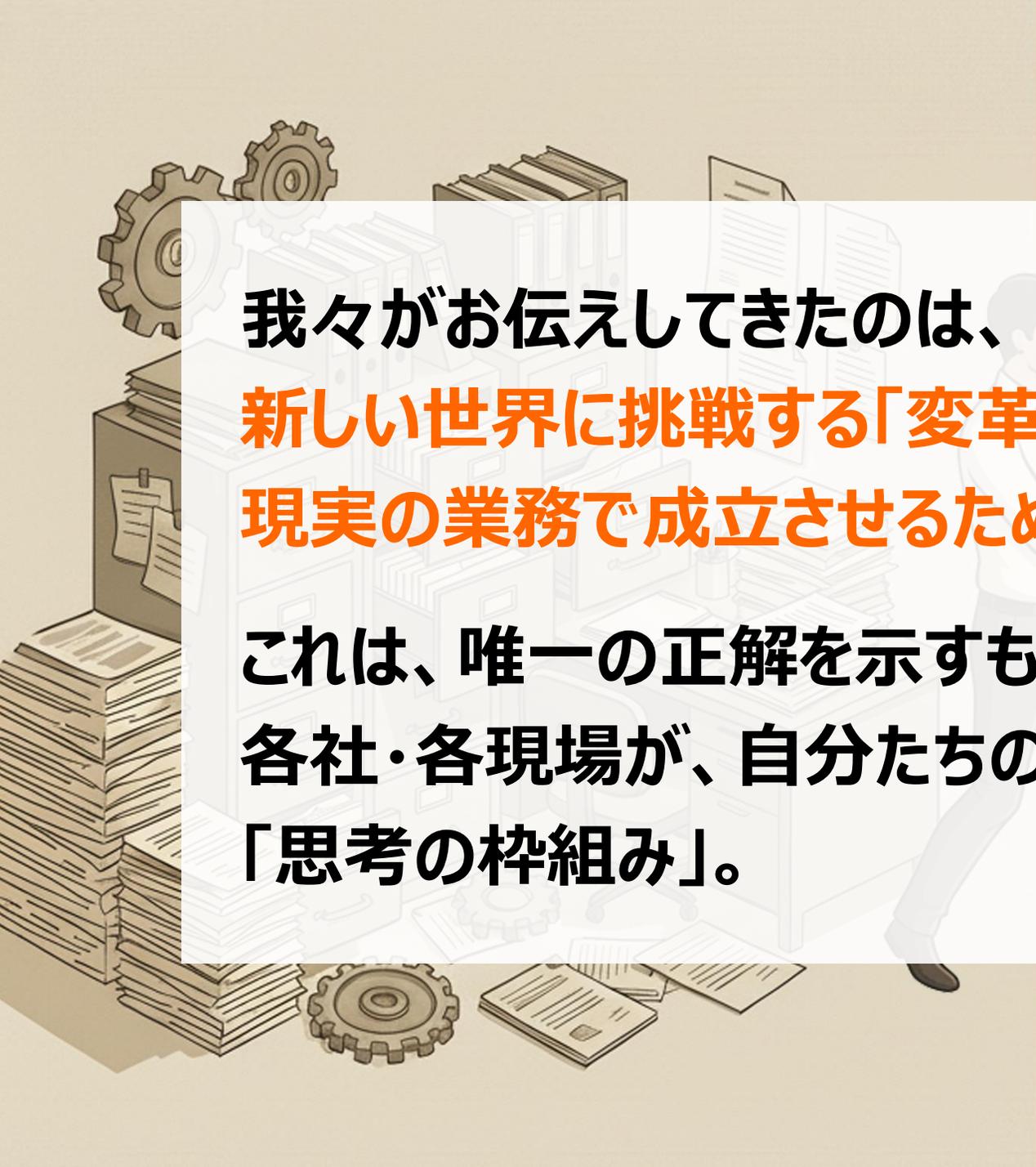
その結果、より大きな価値が生み出される状態を実現すること。

人とAIの協働から価値が生まれる
新しい世界へ



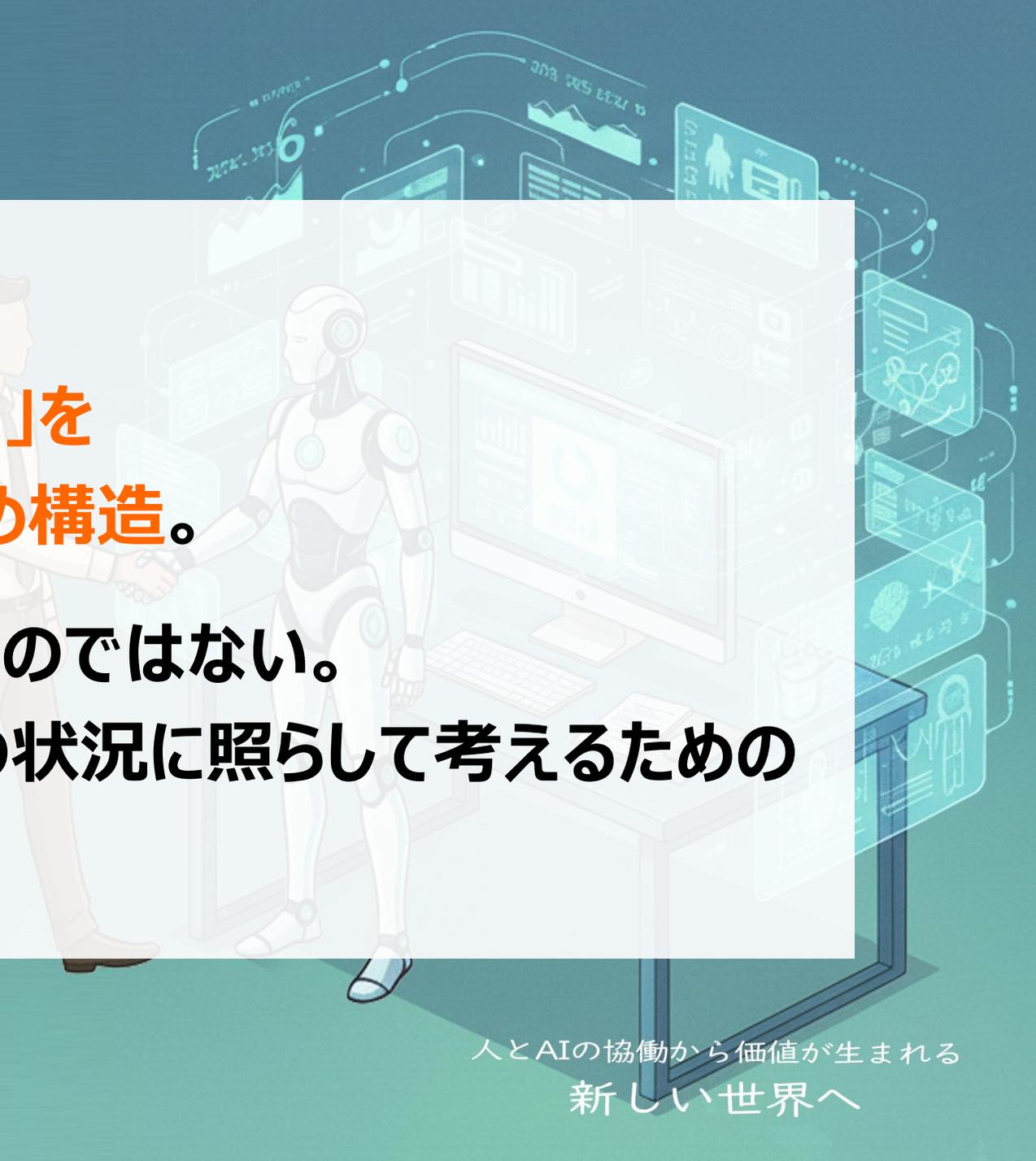
人とAIが協働し、より大きな価値を生み出す新しい世界。
その世界を認識し、目指し、
まずは身近な業務から、挑戦してほしい。

人とAIの協働から価値が生まれる
新しい世界へ



**我々がお伝えしてきたのは、
新しい世界に挑戦する「変革」を
現実の業務で成立させるため構造。**

**これは、唯一の正解を示すものではない。
各社・各現場が、自分たちの状況に照らして考えるための
「思考の枠組み」。**



人とAIの協働から価値が生まれる
新しい世界へ



**今こそ、あなた自身が、
あなたの会社での「新しい世界への最初の一歩」を踏み出す時**

人とAIの協働から価値が生まれる
新しい世界へ

人とAIが協働し、より大きな価値を生み出す新しい世界 ——

新しい世界へ AIとともに挑戦し、変革を楽しもう！

業務をリデザイン(B)分科会

